

羅生門

芥川龍之介

本文：青空文庫（入力：平山誠、野口英司／校正：もりみつじゅんじ）
底本：「芥川龍之介全集」ちくま文庫、筑摩書房

ある日の暮方の事である。一人の下人^{げにん}が、羅生門^{らしやうもん}の下で雨やみを待っていた。

広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗^{にぬり}の剥^はげた、大きな円柱^{まるばしら}に、蟋蟀^{きりぎりす}が一匹とまっている。羅生門^{らしやうもん}が、朱雀大路^{すざくおおじ}にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠^{いちめがさ}や揉烏帽子^{もみえぼし}が、もう二三人はありそうなのである。それが、この男のほかに誰もない。

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風^{つじかぜ}とか火事とか饑饉^{うだわい}とか云う災^{わざ}がつづいて起った。そこで洛中^{らくちゆう}のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎^{うちさい}いて、その丹^にがついたり、金銀の箔^{はく}がついたりした木を、路^{みち}ばたにつみ重ねて、薪^{たきぎ}の料^{しやう}に売^うっていたと云う事である。洛中^{らくちゆう}がその始末であるから、羅生門^{らしやうもん}の修理などは、元より誰も捨てて顧^{かへ}る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸^{こり}が棲^すむ。盗人^{ぬすびと}が棲^すむ。とうとうしまいに、引取り手のない死人^{しにん}を、この門へ持つて来て、棄^すてて行くと云う習慣^{しやうへん}さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を悪^{わる}うがって、この門の近所^{きんじよ}へは足^あぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代りまた鴉^{からす}がどこからか、たくさん集つて来た。昼間見ると、その鴉^{からす}が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾^{しうび}のまわりを啼^なきながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼^{ゆふやく}けであかくなる時には、それが胡麻^{ごま}をまいたようにはつきり見えた。鴉^{からす}は、勿論、門の上にある死人^{しにん}の肉を、啄^{つば}みに来るのである。——もっとも今日は、刻限^{こくげん}が遅^{おそ}いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩^{くずれ}れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段^{いしかだ}の上に、鴉^{からす}の糞^{ふん}が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺^{あお}の襖^{あお}の尻^{しり}を据^あえて、右の頬^ほに出来た、大きな面皰^{めんぼ}を氣にしながら、

ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微すいびしていた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と言うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」と言う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申まのの刻下こくげりからふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日あすの暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した藁いらかの先に、重たくうす暗い雲を支えている。

どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでゐる遣いさまはない。選んでいれば、築土ついでの下か、道ばたの土の上で、餓死うえじをするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度と同じ道を低徊ていかいした揚句あげくに、やつとこの局所ほうちやくへ逢着した。しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人

は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇氣が出ずにいたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晚樂にねられそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったからである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上って見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと動かしているらしい。これは、その濁った、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映ったので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この

羅生門の上で、火をともしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮やもりのように足音をぬすんで、やっと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平たいらにしなから、頸のどを出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗のぞいて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸しがいが、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏こねて造った人形のように、口を開あいたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくるがっている。しかも、肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唾おしの如く黙っていた。

下人げにんは、それらの死骸の腐爛ふらんした臭氣に思わず、鼻を掩おおった。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。

下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲うすくまっている人間を見た。檜皮色ひわだいろの着物を着た、背の低い、瘦やせた、白髪頭しらがたまの、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片きざれを持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時ざんじは呼吸いきをするのさえ忘れていた。旧記の記者

の語を借りれば、「頭身とうしんの毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱しらみをとるよう
に、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行つた。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。――いや、この老婆に対すると云つては、語弊ごへいがあるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死うえじをするか盗人ぬすびとになるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片きざれのように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである。

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄せいりつかの太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云うまでもない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩いしゆみにでも弾はじかれたように、飛び上った。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。

「己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようとするような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居たのだから、それを己に話しさえすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになった唇を、何か物でも噛んでいのように動かした。細い喉で、尖った喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。

「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髪を毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにゐる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死ななんだら、今でも売りに往んでゐた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじやて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしてゐた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじやて、仕方がなくする事じゃわいの。じやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしにする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大体こんな意味の事を云った。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面皰を気にしながら、聞いているのである。しかし、これを聞いている中に、下人の心には、ある勇氣が生まれて来た。それは、さっき門の下で、この男には欠けていた勇氣である。そうして、またさっきこの門の上へ上って、この老婆を捕えた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動こうとする勇氣である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながら、嘸みつくようにこう云った。

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたより